



# 第 1 日

# 国 語

(9 : 30 ~ 10 : 20)

## 注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙の1ページから13ページに、問題が一から四まであります。  
これとは別に解答用紙が1枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

祖父の三回忌の法事のある前の晩、信太郎は寢床で小説を読んでいると、並んで寝ている祖母が、「明日坊さんのおいでなさるのは八時半ですぞ。」と云った。

しばらくした。すると眠っていると想った祖母がまた同じ事を云った。彼は今度は返事をしなかった。「それまでにすっかりをしておくのだから、今晚はもうねたらいいでしょう。」「わかってます。」間もなく祖母は眠ってしまった。

どれだけか経った。信太郎も眠くなった。時計を見た。一時過ぎていた。彼はランプを消して、寝返りをして、そして夜着の襟に顔を埋めた。翌朝（明治四十一年正月十三日）信太郎は祖母の声で眼を覚ました。

「六時過ぎましたぞ。」驚かすまいと耳のわきで静かに云っている。

「今起きます。」と彼は答えた。「すぐですぞ。」そう云って祖母は部屋を出て行った。彼は帰るようにならな眠ってしまった。

また、祖母の声で眼が覚めた。「すぐ起きます。」彼は気安めに、唸りながら夜着から二の腕まで出して、のびをして見せた。

「このお写真にもお供えするのだからすぐ起きておくれ。」お写真と云うのはその部屋の床の間に掛けてある擦筆画の肖像で、信太郎が中学の頃習った画学の教師に祖父の亡くなった時、描いてもらったものである。黙っている彼を「さあ、すぐ。」と祖母は促した。「大丈夫、すぐ起きます。——むこうへ行行って下さい。すぐ起きるから。」そう云って

彼は今にも起きそうな様子をして見せた。祖母は再び出て行った。彼は

また眠りに沈んでいった。

A 「さあさあ。どうしたんだつき。」今度はカドのある声だ。信太郎はせつかく沈んでいく、まだその底に達しない所を急に呼び返される不愉快から腹を立てた。「起きると云えば起きますよ。」今度は彼も度胸を据えて起きると云う様子もなかった。「本当に早くしておくれ。もうお膳も皆出てますぞ。」「わきへ来てそうぐずぐず云うから、なお起きられなくなるんだ。」「あまのじゃく！」祖母は怒って出て行った。

信太郎ももう眠くはなくなった。起きてもいいのだが余り起きる起きると云われたので実際起きにくくなっていった。彼はボンヤリと床の間の肖像を見ながら、それでももう起こしに来るかもう起こしに来るかという不安を感じていた。起きてやろうかなと思う。しかしもう少しと思う。もう少しして起こしに来なかつたら、それに免じて起きてやろう、そう思っている。彼は大きな眼を開いてまだ横になっていた。

いつも彼に負けない寝坊の信三が、今日は早起きをして、隣の部屋で妹の芳子と騒いでいる。「お手玉、南京玉、大玉、小玉。」とそんな事を一緒に叫んでいる。そして一段声を張り上げて、「その内大きいのは芳子ちゃんの眼玉。」と一人が云うと、一人が「信三さんのあたま。」と怒鳴った。二人は何遍も同じ事を繰り返していた。

また、祖母が入って来た。信太郎はまた起きられなくなった。「もう七時になりましたよ。」祖母はこわい顔をしてかえって丁寧に云った。信太郎は七時のはずはないと思つた。彼は枕の下に滑り込んでいる懐中時計を出した。そして、「まだ二十分ある。」と云った。「どうしてこう……。」祖母は溜息をついた。「一時にねて、六時半に起きれば五時間

半だ。五時間半じゃあ眠いでしょ。」「宵に何度ねると云つても詰まもしないで……。」信太郎は黙っていた。

「すぐお起き。おつけ福吉町からも誰か来るだろうし、坊さんももうお出でなさる頃だ。」祖母はこんな事を言いながら、自身の寢床をたたみ始めた。祖母は七十三だ。よせばいいのにと信太郎は思っている。祖母は腰の所に敷く羊の皮をたたんでから、大きい敷蒲団をたたもうとして息をはずませている。祖母は信太郎が起きて手伝うだろうと思つている。ところが信太郎はその手を食わずに故意に「ヒヤやかな顔をして横になったまま見ていた。とうとう祖母は怒り出した。「不孝者。」

と云つた。「年寄りの云いなり放題になるのが孝行なら、そんな孝行は真つ平だ。」彼も負けずと云つた。彼はもつと毒々しい事が云いたかつたが、失策つた。文句も長過ぎた。しかし祖母をかつとさすにはそれで十分だつた。祖母はたたみかけをそこへほうり出すと、涙を拭きながら、烈しく唐紙をあげたてして出て行った。

彼もむつとした。しかしもう起こしに来まいと思つと案々と起きる気になれた。彼は毎朝のように自身の寢床をたたみ出した。大夜着から中の夜着、それから小夜着をたたもうとする時、彼は不意に「ええ」と思つて、今祖母がそこにほうつたように自分もその小夜着をほうつた。彼は枕元に揃えてあつた着物に着かえた。

B あしたから一つ旅行をしてやろうかしら。諏訪へ氷滑りに行ってやろうかしら。諏訪なら、この間三人学生が落ちて死んだ。祖母は新聞で聴いているはずだから、自分が行っている間少なくとも心配するだろう。押し入れの前で帯を締めながらこんな事を考えていると、また祖母が

入って来た。祖母はなるべくこつちを見ないようにしてランザツにしている夜具のまわりを回つて押し入れを開けに来た。彼は少しどいてやつた。そして夜具の山に腰を下ろして足袋を穿いていた。

祖母は押し入れの中の用筆筒から小さい筆を二本出した。五六年前信太郎が伊香保から買って来た自然木の筆である。「これでどうだろう。」祖母は今までの事を忘れたような顔をわざと云つた。「何にするんです。」信太郎の方はわざとまだ少しむつとしていた。「坊さんにお塔婆を書いて頂くのつき。」「駄目さ。そんな細いんで書けるもんですか。お父さんの方に立派なのがありますよ。」「お祖父さんのも洗つてあつたつが、どこへ入つてしまつたか……。」そう云いながら祖母はその細い筆を持って部屋を出て行こうとした。「そんなのを持っていつたつて駄目ですよ。」と彼は云つた。「そうか。」祖母は素直にもどつて来た。そして丁寧にそれをまた元の所に仕舞つて出て行った。

C 信太郎は急に可笑しくなつた。旅行もやめだと思つた。彼は笑いながら、そこに苦茶苦茶にしてあつた小夜着を取り上げてたたんだ。敷蒲団も。それから祖母のもたたんでみると彼には可笑しい中に何だか泣きたいような気持ちが起こつて来た。涙が自然に出て来た。物が見えなくなつた。それがポロポロ頬へ落ちて来た。彼は見えないままに押し入れを開けて祖母のも自分のもむやみに押し込んだ。間もなく涙は止まつた。彼は胸のすがすがしさを感じた。

（志賀直哉「或る朝」による。）

(注1) 三回忌の法事 Ⅱ 亡なくなってから二年後の命日に行う仏事。親族などが集まって故人の冥福を祈る。

(注2) 夜着 Ⅱ 掛け布団かかけぶとんの一種。

(注3) あまのじゃく Ⅱ 人の言うことにわざと従わない態度をとる人。

(注4) おっつけ Ⅱ 間もなく。

(注5) 唐紙をあげたてする Ⅱ ふすまを開け閉めする。

(注6) 諏訪 Ⅱ 長野県にある諏訪湖のこと。当時は冬季に湖面が厚い氷に覆われた。

(注7) 伊香保 Ⅱ 群馬ぐんま県の地名。

(注8) お塔婆 Ⅱ 故人の供養くようのためにお経などを書いて墓の後ろに立てる長い板。

1 ①③のカタカナに当たる漢字を書きなさい。

2  に当てはまる適切な語を、漢字二字で書きなさい。

3 <sup>1</sup> どうとう祖母は怒り出したとあるが、次の文は、このとき祖母が信太郎に対して怒り出した理由について述べたものです。空欄Ⅰに当てはまる適切な表現を、二十字以内で書きなさい。

信太郎がなかなか起きない上に、(Ⅰ)から。

4 <sup>2</sup> 可笑しい中に何だか泣きたいような気持ちが起こって来たところがあるが、この描写について、国語の時間に生徒が班で話し合いをしました。次の【生徒の会話】はそのときのある班のものです。これを読んであとの(1)・(2)に答えなさい。

【生徒の会話】

山田… 「可笑しい中に」起こった「泣きたいような気持ち」とはどのような気持ちなんだろう？

森川… まず、信太郎が感じた可笑しさについて考えてみようよ。

段落Bで「旅行をしてやろう」と考え付いたのに、段落Cでは「急に可笑しくなつて」で「旅行もやめだ」と思ったのだから、信太郎の考えがそのように変化したきつかけに着目したらどうかな。

中村… そうだね。筆を取りに来た祖母と接してから旅行をやめたということは、祖母と接したことで、「旅行をしてやろう」という気持ちがおさまったのだと考えられるよね。でも、どうして祖母に接したことで気持ちがおさまったのかな。

森川… 私は、その場面の祖母が信太郎に対してとった態度と関係がある気がするわ。筆を取りに来て以降、祖母が信太郎に対して、(Ⅱ)ことで、信太郎の気持ちが落ち着いたのだと思うわ。

中村… なるほど。そのようにして、段落Aで「腹を立てて」から続いていた怒りが落ち着いたというわけだね。

山田… ちょっと待って。信太郎が旅行を考え付いたのは、確かに

そうした怒りが元にあると思うけど、僕はもう少し詳しく読み取ったんだ。段落A以降、旅行を考え付くまでの展開を踏まえると、諏訪に旅行をしてやろうというのは、(Ⅲ)する気持ちから考え付いたのだと思うよ。

中村… 確かにそうだね。そうすると「急に可笑しくなった」というのは、信太郎が平静になって、ふと自分のことを振り返り、(Ⅳ)というつまらないことで「腹を立てて」、そこから、(Ⅲ)する気持ちで「旅行をしてやろう」とま

で考えたことに気付いたからだと考えられるね。

山田… 僕も同じように考えたよ。では、「泣きたいような気持ち」とはどのような気持ちかな。

森川… 信太郎が祖母の夜具をたたんだときに、その気持ちが起こって来たというところも踏まえると、「泣きたいような気持ち」というのは、(Ⅴ) ( ) 気持ちだと考えられるわ。

山田… なるほどね。そうした気持ちから思わず涙を流し、自分の気持ちに素直になれたことが「すがすがしさ」を感じることにつながるのだろうね。

(1) 空欄Ⅱ・Ⅳに当てはまる適切な表現を、空欄Ⅱは三十字以内、空欄Ⅳは十字以内で書きなさい。また、空欄Ⅲに当てはまる最も適切な表現を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア 祖母を軽蔑    イ 祖母を敬遠  
ウ 祖母と決別    エ 祖母に反抗

(2) 【生徒の会話】中の傍線部分の問いかけに対して、森川さんはどのように答えたと考えられますか。空欄Ⅴに当てはまる表現を書きなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

春になれば鶯が鳴き、枯れ野に若菜がよみがえる。夏の夜は蛍が舞い、秋になれば赤とんぼが水辺に降り、雁が空を渡る。春の大潮の日には潮干狩りを楽しみ、田植え前の田んぼに産卵にやってくる鯉や鮒を生け捕り、ススキの穂の出るころには山でキノコを狩る。それは、毎年確実に繰り返された、よみがえる自然の恵みとの出会いである。そのような自然であれば、人々は、それを信賴し、その恵みにたよって安全で豊かな暮らしを営むことができる。

ごく最近まで、日本列島の人々は、大方、そのような自然に囲まれて暮らしてきた。田んぼは主食の米だけでなく、副食の魚や貝や野菜をも恵んでくれるウエットランドであった。太古の昔から連続と続いてきた営みとそれを包む自然の間の確かな絆は古い詩歌に詠みこまれ、新しい時代になっても違和感のない共感を寄せることができたのである。

数十年前から事情が一変した。そのころから、一定の範囲のなかで揺れ動くのではない、とどまることのない不可逆的な自然の変化が目立つようになったのである。人々のなじみ深い身近な動植物が姿を消し、異国からやってきた動植物が目立つようになった。少なくとも数千年の間、人々が馴れ親しみ、また、その生業を支えてきたともいえる自然が急速に異質なよそよしいものに変化しはじめた。しかもその変化のスピードは時間とともに加速した。気がつくやうに、絶滅危惧種が二六六三種にものぼる事態となっていた。

水辺のコンクリート護岸化など土地の改変をとまなうさまざまな開発、

とが必要である。

次に、「種の供給源」となりうる場所をしつかりと保全しながら、そこからの生物の移動分散が可能な範囲において生息場所を回復する取り組みを実施する。すなわち、「種の供給源」となる場所の近隣のため池などで植生帯を回復させて生息条件を整える。水生植物などが失われている場合には、池の底の泥のなかに生き残っている植物の種子を活用して、水辺の植生帯を取り戻す。水辺の植物のなかには、地上から失われても寿命の長い種子を残しているものが多いからである。そのうえで、供給源となるため池などからの水生生物の自然な移入を待つ。そして、供給源と再生した生息場所が実際に有効に機能したかどうか、再移入が起こったかどうかを科学的なモニタリングによって確かめる。

さらに、その再生事業が成功し、新たな種の供給源として機能する淡水生態系が確立したら、今度はそこからの移動分散が可能な範囲で再生事業を実施する。そのようにして、淡水生態系のネットワークを再生できれば、絶滅を防ぎ、地域全体に健全な淡水生態系を回復させることができるだろう。

(鷺合いつみ 「自然再生」による。)

(注1) ウエットランド Ⅱ 浅い水域も含めた湿地帯の総称。

(注2) 不可逆 Ⅱ 元に戻せないこと。

(注3) 二六六三種 Ⅱ 平成十六年に環境省が公表した数値。

(注4) 共生的生物間相互作用 Ⅱ 異なる生物間にみられる働きで、生物間に良いつながりをもたらすもの。

大量の肥料投入などともなう富栄養化、汚染、外来生物の蔓延などの影響で、生活の場と条件を失った生物が絶滅に向けて急速な衰退を続けている。その歩みが、ついに最後の段階に入りつつあるというのが野外で植物の生活を見つめてきた研究者の偽らざる実感である。患者たちが死んでいくの手をこまねいて見ているわけにはいかない、何とかして絶滅をくい止めたい、という気持ちで、生物多様性を回復させるための自然再生を提案したいと思う。

ここで提案するのは、多くの絶滅危惧種を「絶滅の災禍」から救出し、また、失われた共生的生物間相互作用を取り戻すための最後の手段である。同時に、古来の豊かな「自然と共生する」文化を継承するための条件を取り戻すことにもつながるものである。

日本の水田やため池を生活の場とする淡水生態系の生物が、現在きわめて厳しい状況におかれている。衰退は現在も加速されつつあり、すでに、水草の三分の一は絶滅の危機にあり、ゲンゴロウなどかつて普通に見られた生物を見つけ出すのもむずかしい。移動分散力の小さい生物は、人知れず地域から、さらにはその地方から絶滅しつつある。その保全・再生には、相当な努力を要する厳しい段階に入っているといわなければならない。諦めずに回復を図るには、次のような実践を今すぐにも始める必要があるだろう。

まず、淡水生態系の生き物たちを絶滅させないために、今でもまだその生物相を維持している昔ながらの水田やため池が残されている場所を見つけ出し、そこを回復のための「種の供給源」として効果的に保全することが何よりも重要である。そこからは徹底して外来種を排除するこ

(注5) 生物相 Ⅱ その環境に生息する生物の全種類。

(注6) 植生帯 Ⅱ 植物が群生している場所。

(注7) モニタリング Ⅱ 継続的な観測や測定。

1 ①③の漢字の読みを書きなさい。

2  に当てはまる最も適切な語を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア つまり イ だから ウ ところが エ さらに

3 何とかして絶滅をくい止めたい、という気持ちで、生物多様性を回復させるための自然再生を提案したいと思うとあるが、絶滅をくい止め、生物多様性を回復させることは、今後の日本列島の人々にとってどのような意義をもつと筆者は考えていますか。この文章における筆者の主張を踏まえて四十五字以内で書きなさい。

4. 次のような実践とあるが、ここで筆者が提案している実践について、生徒が思ったことを話し合いました。次の【生徒の会話】はそのときのものです。【木下さんがまとめた図】、【西本さんが読んだ文章】は、【生徒の会話】の中で木下さん、西本さんがそれぞれ話題にしているものです。これらを読んで、あとの(1)・(2)に答えなさい。

【生徒の会話】

小林… 筆者の鷺谷さんが提案している自然再生の実践にはいくつかの段階があるようだね。  
 木下… そうだね。私は、筆者の提案を分かりやすくするために、提案の概要を図にまとめてみたよ。  
 青木… あれ？ 図中の③の説明は、下線部分が筆者の提案と違うと思うよ。筆者の提案によれば、その下線部分は「( I )」という説明になるはずよ。  
 木下… なるほど、確かにそうね。直しておくわ。  
 青木… この方法がうまくいけばいいわね。  
 西本… そうだね。僕は、絶滅危惧種を絶滅から救う方法に興味をもったので、鷺谷さんの提案の他にも方法がないかと思つて調べてみたら、絶滅危惧種を保全する方法についてまとめている文章を見付けたので読んでみたんだ。  
 小林… いろんなことが述べられていたの？  
 西本… その文章には、保全の方法が二つ述べられていたんだ。二つの方法のうち、( X ) ( Y ) ことによつて数が増える

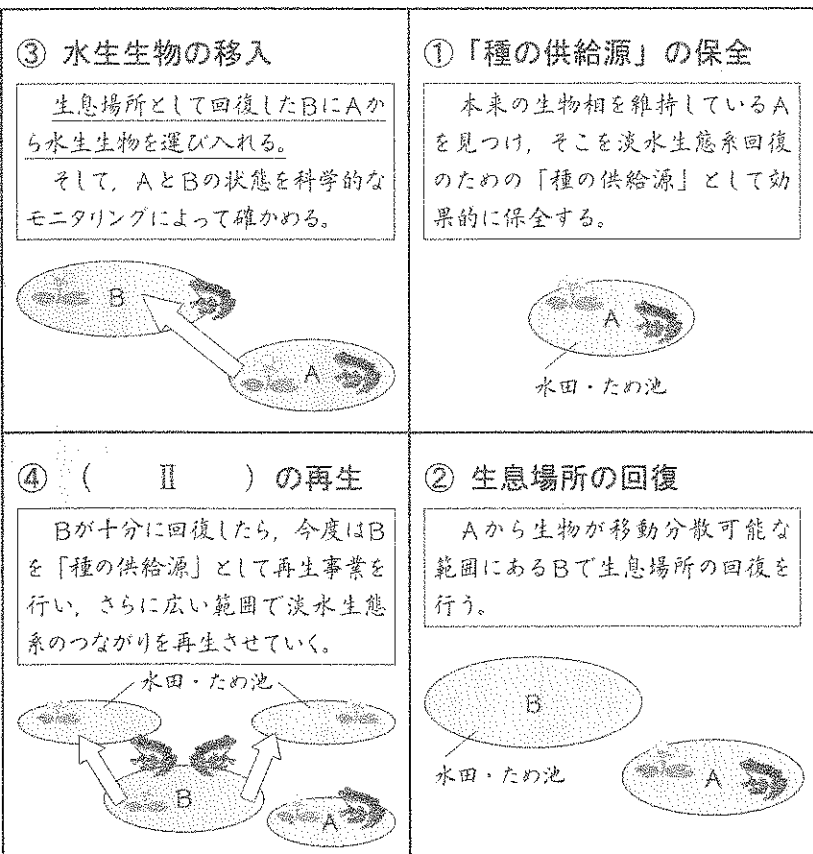
【西本さんが読んだ文章】

絶滅危惧種を守るにはどのようにすれば良いのでしょうか？ある生きものが絶滅の危機にさらされている場合、その原因は生息地にあります。このため、生存をおびやかす原因を科学的に特定して、これらを取り除くなど、生息環境を改善することで、生息地で数が増えるようにすることが重要になります。しかし、絶滅危惧種の生息地では、生存をおびやかす原因が様々あり、またこれらを取り除いていくことは簡単ではないため、多くの時間がかかります。このため、生息地ではなく、安全な施設に生きものを保護して、それらを育てて増やすことにより絶滅を回避する方法があります。これを「生息域外保全」と呼びます。例えば、動物園や水族館、植物園などで絶滅のおそれのある生きものをたちを飼育・栽培しているのも「生息域外保全」にあたります。生きものを絶滅させないためには、生息地での保全の取り組みと同時に「生息域外保全」をあわせて総合的に取り組むことが求められています。

(環境省ウェブページによる。)

るようにするという保全の方法は、鷺谷さんの方法に近く、それとは別に、( Y ) ( Z ) ことによつて数が増えるようにするという保全の方法があるんだ。絶滅危惧種を救うには、両者の方法に総合的に取り組む必要があるということだよ。

【木下さんがまとめた図】



(1) 【生徒の会話】中の空欄Iに当てはまる適切な表現を、三十五字以内で書きなさい。また、【木下さんがまとめた図】中の空欄IIに当てはまる最も適切な表現を、本文(鷺谷いづみ 「自然再生」による。)中から十五字以内で抜き出して書きなさい。なお、解答は縦書きで書くこと。

(2) 【生徒の会話】中の空欄X・Yに当てはまる適切な表現をそれぞれ書きなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

和邇部用光わにべのもちみつといふ注1 楽人ありけり。土佐の御船遊注2びに下りて、上りける

御船遊びのために土佐の国に下り、また都に上った時に

に、安芸の国あき、なにがしの泊まりにて、海賊押し寄せたりけり。弓矢の

何とかという港

行方知らねば、防ぎ戦ふに力なくて、今注1はうたがひなく殺されなむす

頼りとする方法

殺されるたろう

と思ひて、注3 筆しつを取り出でて、注4 屋形やがたの上に注2ゐて、「あの覚あきや。今は沙汰

座つて その連中よ

に及ばず。とくになにもものも取り給へ。ただし、年としごろ、思おもひしめたる

あれこれ言つて 早く

長年の間に深く思つてきた

筆しつの、小調子せうてうしといふ曲、吹ふきて聞きかせ申まをさむ。さることこそありしか

お聞かせしよう

こんなことがあつたぞ

と、のちの物語にもし給へ。」といひければ、宗徒むねとの大きな声にて、

話の種

海賊の親分

「主しゅたち、しばし待まち給へ。かくいふことなり。もの聞きけ。」といひ

お前たち

あのように

聞いてやろう

ければ、船ふねを押おさへて、おのおのしづまりたるに、用光もちみつ、今はかぎり

停泊させて

最期

おぼえければ、涙なみだを流ながして、めでたき音を吹ふき出だでて、吹ふきすましたり

素晴らしい

心を澄まして吹いた

けり。

をりからにや、その調べ、  
折しもよかつたのだらうか

波なみだの上にひびきて、かの薄陽うすひかり

江えのほとりに、琵琶ひばを聞きし

琵琶の音が水上に

昔語むかしことりにことならず。

鳴り渡つて聞こえたという昔の詩に詠まれた情景のようである

海賊、静まりて、いふことなし。よくよく聞きて、曲終はりて、先の声

にて、「君が船に心をかけて、寄せたりつれども、曲の声に涙落ちて、

ねらいを付けて

かたさりぬ。」とて、漕こぎ去りぬ。

ここはやめた

〔十訓抄〕による。



1 今いまはうたがひなく殺されなむすとあるが、海賊が押し寄せた時、  
用光もちみつはどのようなことからこのように思ったのですか。現代の言葉を  
用いて二十五字以内で書きなさい。

2 ゐてを、現代かなづかいで書きなさい。

3 しばし待まち給へとあるが、宗徒むねとはどうすることを待てと言つたの  
ですか。次のア・イ・エの中から最も適切なものを選び、その記号を書き  
なさい。

ア 自分たちの乗っている船を都に向かわせること

イ 用光の乗っている船に押し入つて略奪をすること

ウ 小調子という曲を聞いたと人に話すこと

エ 自分たちの乗っている船を停泊させること

4 この文章について、生徒が次のような話し合をしました。空欄Ⅰ  
に当てはまる適切な表現を、現代の言葉を用いて二十字以内で書きな  
さい。また、空欄Ⅱに当てはまる最も適切な表現を、あとのア・イ・エの  
中から選び、その記号を書きなさい。

野村… この文章を読んで疑問に思ったのだけれど、荒々しいイメ

ージのある海賊が、筆しつの演奏を聞いて、素直に涙を落とし  
て「かたさりぬ」と思うものかなあ。

黒田… 僕もそのことが気になって、「十訓抄」を図書室で借り  
て現代語訳を読んで、似たような話がないか探してみたら、

- (注1) 楽人 Ⅱ 雅楽の演奏者。
- (注2) 御船遊みふねあそび Ⅱ 神社の祭事の一つ。船上で作詩や詠歌、奏楽が催された。
- (注3) 筆しつ Ⅱ 楽器の名。竹でできた縦笛の一種。
- (注4) 屋形 Ⅱ 船上に設けた屋根付きの部屋。
- (注5) 小調子 Ⅱ 曲名。特定の者だけに伝授される曲であつた。
- (注6) 薄陽江 Ⅱ 長江。

この海賊の話と同じように笛を吹く話があつたんだ。それは  
こんな話だつたよ。

【黒田さんが読んだ話の要約】

楽人の助元は、牢屋らうやに閉じ込められてしまった。助元は、  
「この建物には蛇・サソリが棲すまむというではないか」と、たい  
そう恐れていたところ、案の定、夜中に大蛇がやって来た。大  
蛇は長い舌を出して大きな口を開け、今にも助元を呑み込もう  
とした。助元は半分気を失いながらも、ガタガタ震える手で腰  
に差していた笛を抜き出して、「還城楽げんじょうらく」(曲名)を吹き出し  
た。すると、大蛇は前まで来て止まり、その首を高く持ち上  
げ、しばし笛に聞き入つた後、もとの方へ戻つていった。

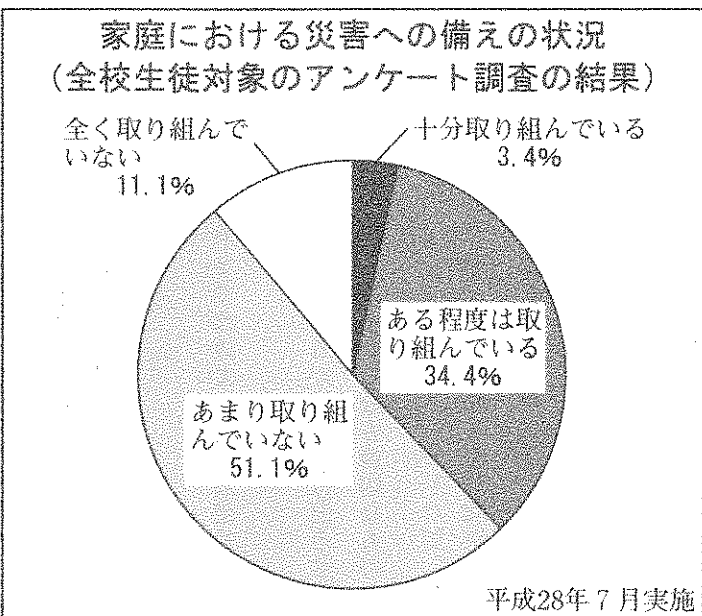
野村… なるほど。どちらの話にも共通しているところがあるね。  
どちらの話も、主人公が音楽を奏かなでると、海賊や大蛇といっ  
た、主人公にとって恐ろしい相手が(Ⅰ)と(Ⅱ)という展  
開ひらきになっているよ。

黒田… そうか。この二つの話からすると、当時、(Ⅰ)と思わ  
れていたと考えられるね。

ア 音楽は、どんな聞き手に対しても澄んだ心で奏でるべきだ  
イ 音楽は、上手に演奏すると危険にさらされることがある  
ウ 音楽には恐ろしい相手に影響を及ぼすような不思議な力がある  
エ 音楽には演奏した人に勇気を与えるという素晴らしい力がある

四 青空中学校の生徒会では、防災に対する生徒の意識を高めるために、「防災のために中学生ができること」について、生徒会役員が調べたり考えたりしたことを記事にまとめ、全校生徒に配付する「生徒会だより」に載せることになりました。次の【資料1】～【資料3】は、生徒会役員が調べたり集めたりした資料、【記事の配置】は、「生徒会だより」に掲載する記事の配置です。これらを読んで、あとの【問い】に答えなさい。

【資料1】



【資料2】

「居安思危」、この言葉を覚えてください。「居安思危、思則有備、有備無患」と続きます。「安きに居りて危うきを思う、思えばすなわち備えあり、備えあれば患いなし」と読みます。このうち「備えあれば患いなし」は皆さん知っていますね。けれども、備えれば憂いはなくなるのは当たり前です。備えられないことに問題があるのです。「安きに居りて」のうちに、「危うき」のことを思えるかどうか。それによって備えることができるかどうか。それができてはじめて、「備えあれば患いなし」となるのです。

(片田敏孝 「人が死なない防災」による。)

(注1) 安きに居りて 〓 平穏な状態にいるときに。

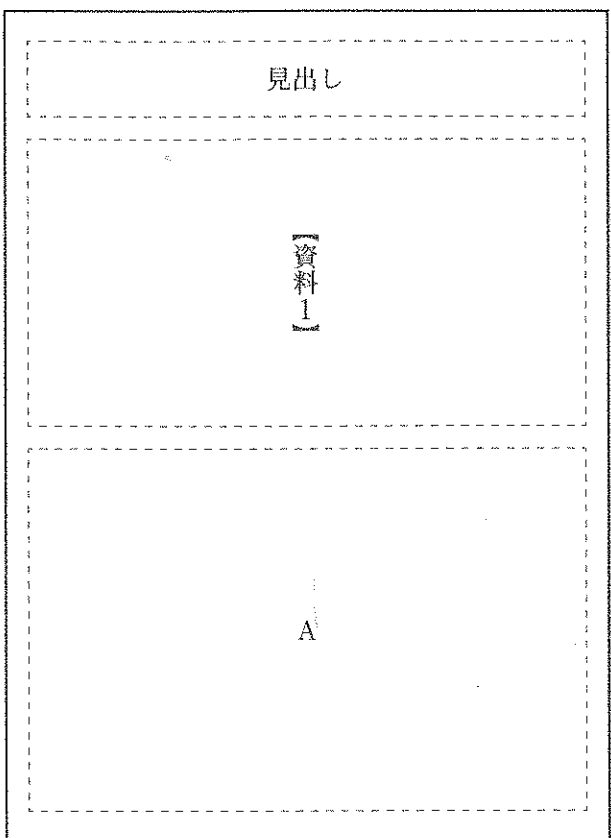
(注2) 患い 〓 心配事。「憂い」も同じ。

【資料3】

防災の基本は「自分で自分の身を守ること」にあります。自分のいのちを守れたからこそ、次に家族や友人、近隣住民などに救助の手を広げることができます。自分の身が守れたなら、周囲の人と助け合っ  
て危険な状況、状態にある人を救助するべきです。中学生や高校生であつても、安全を確保できる範囲での救助活動が望まれます。必ずしも自宅のある地域に大人がいるとはかぎりません。助けられる立場ではなく、助ける立場であることを意識することによって、受け身ではなく、自分で考えて自ら行動する姿勢を心がけてください。

(川手新一・平田大二 「自然災害からいのちを守る科学」(岩波書店)による)

【記事の配置】



【問い】

生徒会役員の早川さんは【記事の配置】のAの部分に、資料を踏まえて、防災の課題と、その課題を受けて防災のために中学生ができることを挙げ、校内の生徒の防災に対する意識が高まるような文章を書くことにしました。あなたならどのように書きますか。次の条件1～3に従って書きなさい。

条件1 【資料1】～【資料3】のそれぞれの資料の内容を踏まえて書くこと。

条件2 防災のために中学生ができることについては、具体的な例を挙げて書くこと。

条件3 解答用紙に示している書き出しに続くように書き、内容に応じて段落を変え、二百五十文字以内で書くこと。ただし、解答用紙に示している書き出しの部分は字数に含まないものとする。



